

非認識論証因における場所 (pradeśa) の限定詞

道 元 大 成

ダルマキールティは *Hetubindu* (以下, HB) において「ある場所 (pradeśa) に壺が存在しない」という否定的論証を為す際に、「その壺が認識されないから」という非認識論証因 (anupalabdhihetu) を用いた。その場合の理由概念となる壺の非認識は、壺とは別なものである場所 (pradeśa) の認識と置き換えられる。しかしながら、ここでの場所は単なる場所を指すのではなく、「他体と結合していない本体を有する」場所という限定が付与されたものである。その「他体と結合していない本体を有する」という限定に対して如何なる意味合いが与えられているのかを、アルチャタの *Hetubinduṭīkā* を中心に検討した。

アルチャタによれば、「他体と結合していない本体を有する」場所には二つの意味がある。まず第一に、「他体と結合していない本体を有する」場所は「壺とは別なもの (anya) である」と主張する。この際に、一つの認識手段の働き (ekapramāṇavyāpāra) によって、あるもの X の措定 (pariccheda) と、それ以外のものである non-X の排除 (vyavaccheda) が同時になされる。そして、X と、non-X に包摂された Y の両者は、互いに区別された別なものであるという点で結合していない。このような非結合は、論理的側面での非結合を示すものである。そして第二に、「他体と結合していない本体を有する」場所は「単独 (kevala) である」と主張する。この場合には、場所が単独で存在することそれ自体が壺の非存在を指し示すものである。このような単独で存在する場所と、存在しない壺とは、その存在性の観点から結合していないといえる。

以上のように、アルチャタは、非認識論証因において場所が認識される際には、論理的側面での非結合と存在論的側面での非結合という二様のあり方でもって場所が把握されると解釈していた。(龍谷大学大学院博士後期課程)